

ワンパンマン×甲鉄城 のカバネリ ~ i f

Jack_amano

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ワンパンマン×甲鉄城のカバネリ

甲鉄城のカバネリ最終話の後に、もしサイタマが現れたら?

最終回見て思わず書いていました。

カバネリ好きな人すいません。もし設定が穴があつてもゆるしてください。

12 / 4 短編予定だつたけど続いちやいました！

目

次

ワンパンマン×甲鉄城のカバネリ

》 i

2 f

17 1

ワンパンマン×甲鉄城のカバネリ ～ i f

一筋の凄まじい輝きの光が降つてきた時、生駒達はこれからどうするか、爆走する装甲機関車『甲鉄城』の中で思案中だつた。

將軍の息子である美馬の裏切りによつて、日ノ本の守りの要である金剛郭をカバネに奪われ、大勢の避難民を乗せたまま、補給もままならぬままに逃げだして来たのだ。

走り続けねば、いずれカバネに追いつかれる—— どこかで食物と水、燃料を手に入れなければならない。

だが人である事と引き換えに、超人的なカバネの力を手に入れたカバネリの生駒と穂積がいても、カバネに乗つ取られた駅と呼ばれる砦…に入つて目的を達成するのは至難の業だつた。

一体どうする？ このまま当てもなく甲鉄城を走らせていては、いずれ全滅だ。

そんな時—— 見張りの者が、銃口がかろうじて出るほどしかない覗き穴から金色の光を引いた玉が空から落ちてきたのを見たのだつた。

激しい音と共に、甲鉄城に振動が走る。

線路の上を爆走していたのが災いした。

事態を察知した機関士が、いち早く内通管に向かって叫ぶ。

「つかまつて下さい！衝撃がきます!!」

耳をつんざく様な金属音——車体はブレーキなぞ意に反さず、大きな音を引いて滑っていく。

地鳴りによつて、甲鉄城は脱線してしまつたのだ。

直ぐ様、甲鉄城の主——細い肩に全ての責を負う少女、四方川菖蒲は、周囲の警戒と、脱線からの復旧、落ちてきた光の正体を探るべく、探索隊を出す事にした。

巨大なクレーターの中に、ハゲた若い男が立つていた。

彼の名はサイタマ、彼の世界で、趣味でヒーローをしていた男だ。

生駒達の和風な様相とは違う、見たこともないような服を着ている。

ボロボロになつた黄色いツナギ、からうじてマントと分かる白い肩掛け、彼は大事そ
うに胸に抱えていた若い男に話しかける。

その男もまた、生駒達が見たこともない——鋼鉄の身体を持つ男だつた。

「生きてるか？ジエノス」

「はい：先生」

彼らは、彼らの世界のラスボスともいえる厄災、『レベル神』と戦い、これに勝つた。あまりの激しい戦いに、時空は裂け、地表は荒れた。勝ったとは言え、被害は甚大だった。

それよりもサイタマを失望させたのは―― 守った筈の人々に、次の『レベル神』扱いされた事と、もうこの世には、彼に勝てる敵はないという事実だった。

彼は死に逝く『レベル神』にされるがまま： 共に、時空の裂け目に落ち込んだ。

正直もう、どうでもいいと思った。

彼の弟子――『鬼サイボーグ、ジエノス』が、サイタマを救う為に、単身、時空の

穴に飛び込んで来るまでは――

「G P Sが起動しません。どうやら衛星が存在していないようです。ですが落下の際に見た限りでは周囲50キロ内に都市はありません」

「そうか」

十徳ナイフのように様々な機能についているジエノスを、サイタマは疑つたことがなかつた。

彼がないと言えば、本当にはないのだろう。

「ただ―― 左十時方向に、高エネルギー反応があります。今は止まっていますが、先ほどまでかなりのスピードで移動していました」

いつまでもここにいたって仕様がない。

「よつしや。取り敢えず行くか」

サイタマはいつものようにのんびりと、総重量200kgの彼の弟子を抱えたまま歩き出した。

「ここが——彼の友達『キング』から借りて、まだ一度もクリアー出来た事がないゲーム、『バイオハザード』のような世界とも知らずに——

甲鉄城では、技術者の間で、軽い恐慌が起きていた。

ここは山の中。

重機機器などある筈がない。脱線を直す方法が見つからないのだ。

いくら力があるとはいえ、生駒達カバネリの力だけでは甲鉄城を線路に戻すのは難しい。

だが、このままここにいれば、確実にカバネ達が押し寄せてくるだろう。

そこに、また、事態を混乱させる一報が入ってきた。

「菖蒲様！森の中からおかしな格好をした坊主がこっちに向かってきます！」

ここは古戦場跡、多くのカバネが潜む山の中だ。普通に考えても、人がいることはお

かしい。

だが―― 保護を求める人だとしたら、放つておく事もできまい。

自分の保身のためだけに、弱者を切り捨てる者は―― 容易く人以外のモノとなる。

それは菖蒲あやめが、カバネとなつても人の心を失わずにカバネリとなつて人を守り続けた、生駒いこま達と旅をして得た教訓だつた。

甲鉄城こうてつじょうの高見に登つて遠眼鏡で見てみると、確かに怪我人らしき者を抱えたおかしなハゲ頭の男ががこちらに向かつてきている。

子坊主：…というには年がいつている。が、袈裟けさも着ていない。

「O-u! アレハ私ノ国ノ衣装デスネエ！」

いつの間にか隣にいた技術者の鈴木が声を上げた。

「では、あれは外国とつくにの方？」

外人のように見え、片言の日本語を喋る癖に鈴木と言う名である男は『ワカラナイ』といふようなジエスチャーをする。

その時、菖蒲あやめはまだ距離はあるが、坊主の後ろにカバネの姿を見つけた。
「カバネです！ 拡声器で警告を！ 来栖くるす！ 御坊堂をお守りしてお連れして！」
勿論、坊主と呼ばれていたのはサイタマだ。

坊主とかハゲとか言われる事を滅茶苦茶氣にする男だつたが、菖蒲はそれを知る由もない。

来栖くるすと呼ばれていた、菖蒲あやめの従者である若侍は、軽く頭を垂れると脱兎だつとうの如くに駆け出した。

スピーカーから流れてくる女の声に、サイタマは首を傾げた。

「なんだあれ？」

「カバネはやじろ——とか言つてますね。急いで：駿城はやじろまで逃げてこいと。駿城とはあの機関車の事でしようか？」

「カバネつて？」

「後ろからついてくる奴等ですかね。まだ遠いので目視できるまで静観していただのすが……」

「はやく言え!!」

サイタマが振り向くと、そいつ等はまだかなりの先の方にいた。

だが、人よりもはるかに良い視力の二人には、その異様な姿がはつきりと目にとれた。

「…なにあれ？ 落ち武者？」

「似ていますが、エネルギー反応がないので死体的な何かではないかと……」

「…………ああ、カバネつて屍のカバネかあ」

二人は顔を見合させた。

「ゾンビ？…………それってヤバくね？」

「俺は人と違う。パーツを使つてますから感染はしないと思いますが、先生はどうでしょう？」

サイタマは、キングと遊んだゲームの内容を思い出した。

バイオハザード？ ダイイングライト？ デッドライジング？？どれもこれも救いのない話でいい思い出がない。

「ためしたくないな」

サイタマは取り敢えず走る事にした。

が、サイタマが走り出した途端、森の気配がざわりと変わる。

あちこちに転がつていた死体に命が吹き込まれ、カバネと化して動き出したのだ。

(ヤバいこのまま向こうに行つたら機関車が餌食になる！俺達を助けようと警告してくれたのに)

サイタマは覚悟を決めた。

「ジエノス。俺に何かあつたら、俺を連れて自爆してくれ」

最強の男の、最強のゾンビなど洒落にもならない。この世界は確実に終わりを迎える

だろう。

もつとも、サイタマがそれで死ぬかは分からぬが――
「何処までも御供します」

「悪いな」

言いながら、サイタマはジエノスを横抱きから俵抱きに切り替えた。

坊主がこつちに向かつて走つてくる。

これで坊主は大丈夫だと、来栖が胸をなでおろした瞬間、坊主の足が止まつた。

「何をしてるんだ！こつちに早く来い！」

来栖が叫ぶが早いが、坊主の周囲で怪異がおきた。

こここのカバネ達は、前に人を喰つてからかなり経つていたのだろう。エネルギーが切
れてただの屍のようになつていた軀が、今、贊に気付いたのだ。

「ちい！」

来栖が菖蒲の願いを無碍にする事はない。

彼女が救えと言つたのだ。

来栖はカバネを切る事が出来る刀——カバネの鋼鉄の心臓被膜をまとつた刀を抜
き、カバネの群れに飛び込んだ。

侍がサイタマの方に向かって走つてくる。

彼は、サイタマの仲間だつた『アトミック侍』のように好きで和装を着てるのか？

それともこの世界が和装なのか？

ゾンビ達も着物だから後者だろう。

そんな事を思いながらも、サイタマの拳は躊躇なくゾンビを倒す。

マジパンチではない。

マジならば、山まで削れている。今の状況が良く分からないのに、強大な必殺技をしてしまうのは2次被害を招くのでは？と憚られたのだ。

「うわあ、マジきしょ！」

ゾンビに触りたくない。

いつもは軽くワンパンで片付けるサイタマも、流石に慎重になつている。

だからサイタマは、右腕に霸氣を纏うほど気合を込めて、襲つてくるゾンビに拳圧を繰り出し、触れる前に気合でフツ飛ばして相手を粉碎していた。

「おい！侍！これうつるのか?!」

駆け込んで、サイタマの背を守る形になつた若侍は、サイタマと同じ年頃に見えた。

禍々しく輝く文様を纏つた剣で続け様にゾンビを屠る姿は、彼がかなりの剣の使い手であると証明している。

「傷さえ追わねば大丈夫だ。先に駿城へ！」

「無理だ、数減らさないと機関車がやられる。奴らの弱点は?!」

「心臓だ！だが普通の手段では――」

侍は、素手でカバネを粉碎するサイタマと、彼に抱えられたまま、鋼鉄の腕から焼却砲をうち、確実に心臓を射抜いていくジエノスに気付き、呆然とした。

「侍！ 気い抜くんじやねえ!! 油断すんな！」

坊主のその言葉に、慌てて刀を構え直す来栖。

それは奇しくも、ジエノスがサイタマに日頃言われている言葉だつた。

背負っていたジエノスが、来栖を見てニヤリと笑つた。

生駒と穂積が空から来た異変の探索から帰つてみると、甲鉄城は大変な事になつていた。

「何これ？ 誰がやつたの?!」

穂積の疑問も無理はない。

甲鉄城の周りはカバネの死体で埋め尽くされていたのだ。

それをやつたのが、来栖と、来栖の連れた風変わりな男達だと聞いてまた驚いた。

「なにあのハゲ！カバネりなの？あつちの木偶はなに？」

ハゲがカバネりでないことはカバネりである穂積が一番よく分かつている。

同族は同族をわかるのだ。

でも、自分は強いと自負している穂積に、自分が只の人間より弱いとは認めがたい事だつた。

きっと、やつたのはあつちの鋼鉄の木偶だ。

あんな生き物は見た事がない。

鋼鉄の腕に鋼鉄の身体、端正な顔立ち：人間の白目の部分が黒くなっているが、金の瞳と相まって独特の美しさを作り出している。

技術バカの生駒は、周囲で見守っていた女達がドン引きするほど興奮しながら、新参者たちと会話をしていた。

「ウイルスで感染するんだ？」

「ええ、心臓がカバネのように鋼鉄皮膜で覆われるまで脳を保つていられれば、カバネに

ならず、人間でもカバネでもない存在、カバネリとなつて、カバネの身体能力と人の心を持つた者になります。まあなれる者は稀ですが……」

サイタマは着物に着替えさせられていた。

これ以上、坊さんに見えたらたまらねえと辞退していたのだが、服に付いた血を周りの人々が怖がつた結果だつた。

ウイルス感染するんじやしようがないな。とは思つたものの、正直、足元がスースーして落ち付かない。

「サイタマさんは何処の宗派なのですか？戦う事を認めている宗派は聞いた事がないのですが」

「いや、坊主違うから！」

同じような質問を何度もされ、サイタマは切れかかっていた。

その度に弟子が『失礼な奴め、先生のハゲは強者の証だ！』などと、師匠を師匠と思わないような発言をするので気が遠くなつてくる。

「俺、坊主じゃなくて、ただのハゲだから。頼む！もう触れないで!!」

「で、どこかで食物と水、燃料を手に入れなければならぬいけど、脱線して動けないと。かと言つて、ここは古戦場でカバネが多く、甲鉄城こうてつじょうを降りて、村を造るのも難しいと」

脱線は自分達が空から落ちたせいだと気付いていたが、サイタマはスルーする事にした。

そんな事を説明して、混乱させてもいい事はないだろうと思つたのだ。

「はい。いくらカバネリとは言え、俺達一人では動かせませんし——規格車がないので線路幅を微細に修正するのも不可能です。ここから先、線路は分断されるでしよう」

「出来るよ」

本当は脱線を直す位ならサイタマ一人で余裕に出来るのだが、サイタマはこう後を続けた。

「ジエノスにはレーダーが付いてるし、パワーだつてある、俺も手伝える。ジエノスの足さえ治れば—— 大した不調じやない、あんたなら治せるかもつて聞いたんだけど

「え?! それって…ジエノスさんの内部を見せてもらえるんですか?! 勿論やらせて下さい!!」

技術バカの生駒は二つ返事で引き受けた。

何処にでもいるんだな、こう言うメカオタクつて。生駒の反応に、仲間だつた小学生のヒーローの姿を思い出しながら、サイタマは続けた。

「問題は甲鉄城が復旧した後の事だ。来栖達と話したんだけど：

顕金駅まで戻るのも

ありかと思つて――

顕金駅。それは生駒達の故郷。菖蒲の家、四方川家の治める駅だつた。

蒸気鍛冶や製鉄などの重工業が盛んであり、それ故にカバネ流入され、廃駅となつたのだ。

「俺たちは顕金駅から逃げて――」

「聞いた。でも小さいながらも城壁の中に、水も水田もあるんだろう？外壁も門も壊れてないし、町も複雑な形じやない。敵を狩るには楽そうだ。どこに行く当てもないなら、罠を張つて奪い返すのも手だろう」

「そんな事、考えてもみなかつた――」

この二人は、なんて事を考へるんだろう？

その考へがいい事なのか悪い事なのか分からぬ。

だが顕金駅に戻るという考へに、生駒は恐怖からではない身震いを起した。

「みんなと一緒に考へてみます」

カバネの軀が転がる周囲をみまわす生駒。

生駒と穂積に来栖。狩方衆が手を結んでも無理かもしねりない。

だが、二人がいたら？

生駒は頭の中で様々な計算をしながら、仲間の元に戻つていった。

「どうだ？」

「みんな迷つてますね。先生はこれが最善だと思つていますか？」

超高性能の聴覚で公衆音域を拾つていたらしいジエノスは、サイタマが求めていた答えと違う返答をした。

今、サイタマとジエノスは最後部の車両を二人で与えられている。

ようはするに、三日間離して、カバネにならない事を証明しろという事なのだ。

勿論、本当はこんな車両、弟子のジエノスでも簡単に破壊できる。

だが一人は快く受けた。

「違う違う。足の調子だよ」

「ああ、我慢は出来ます。強度が足りなかつたので、カバネの心臓皮膜の鋼鉄を配合して焼却砲で焼き付けました」

あまり気持ちのいいものではなかつたが、脚を直さねばサイタマの横に立てない。

サイタマの足手纏あじでまといいになるぐらいだつたら—— ジエノスは苦渋の決断をした。

「で、先生はこれが最善だと？」

「難しいな。でも俺達だけならともかく、拠点をもたないと弱い者は守れない。向こうで経験したろ？」

二人は強者ゆえに、巨大な敵と戦う事を選んだ。だがその陰で、すり潰された大勢の人々がいた。

「これから戦いはハンデ戦だ。お前は今までと違つて『肉を切らせて骨を切る』なんて戦法は出来ないし、俺はウイルスを考えるとリスクのあるワンパンは出来ない。前はヒーロー協会に任せっぱなしだつた一般市民も守らなきやならない」

ジエノスは、小さい部品はともかく、今までのようになんか壊れれば、確実に死に至る。サイタマは、もし感染すれば、この星を確実に滅ぼすだろう。

「掛け金は高い。でも、上手く行けばこの星を救える。わくわくするよな」

2

『輪廻の果報があらんことを』

そう言つて共に何人の仲間を見送つてきただろうか？ 狩方衆の瓜生は同じ美馬のもとで彼の爪として闘つてきた無名の変わりよう。鼻を鳴らして抗議した。

彼の気持ちを知つてか知らずか、彼が今まで見たこともない表情で無名は無邪氣に笑う。

「でね、菖蒲様がね、狩方衆の着衣が余つてたら―― 聞いてる瓜生?!」

「聞いてる聞いてる、無名」

「もう、聞いてないじゃない！ 私は穂積ほづみ！ 母様が付けてくれた名前があるんだから！」 無名は辞めたの！」

無名と言う名は、彼女が美馬の為に闘うと決めたときに美馬に付けられた名だ。

彼と共に闘う者達はみんな彼に心酔し、彼に名を付けられ、彼の為に死ぬ覚悟も辞さない筈だつた。

だつたのだが――
『総ての者が闘い身を晒す、臆病者は死に絶え、力ある者は生き残るという世界の理に身を体現すべき』

という美馬の企ては破綻、美馬は死亡。

彼に付き従つていた狩方衆達は、彼らが消耗品の様に扱つていた人々から、その主・四方川 菖蒲の情けで庇護されている身だつた。

総長・美馬の命令とは言え、彼達は余りにも殺し過ぎ、破壊し過ぎた。

無名の様に、瓜生が美馬の言動に疑問を持つた時にはすでに遅すぎ、彼には民衆が彼らを許す日が来るとは到底思えなかつた。

瓜生にも作戦中、何度も知れぬ感情が心を掠めた事はある。

あつたのだが―― その頃、自分達は、ぬるま湯で普通の生活を営む民衆たちを屍から守るための捨て駒で、多くを犠牲にしてゐるのに全く報われていない。という事実が仲間意識を增長させ、上に意見を述べる様な状況ではなくなつていた。

いや、述べていたらとつくに始末されただろうが： 事実、多くの者が戦闘中、どうさくさ紛れに仲間から屠られていた。無名も裏切られ、そんな捨て駒にされた内の一人だ。

「菖蒲様があの坊主達の為に予備があるのなら着衣を用立てて欲しいって」

「はあ？ 得体の知れないあいつ等を狩方衆に入れろっていうのか?!」

「だから違うって！ 瓜生達があいつ等の預りになるんだよ」

「はあ?!」

無名が言つてゐる坊主達とは、何日か前にやつてきたハゲと木偶人形の二人組だ。

恐ろしく強い、嘘のようないい、屍カバネを狩る事を生業なりわいにしていた狩方衆よりも、もしかしたら屍カバネリ戻りの無名達と同じくらい強いかもしけないハゲ（一見無氣力）。と、そのハゲの弟子だという掌たなごころから炎を噴き出す、鋼鐵製の木偶人形の魔人。瓜生からしてみれば、屍カバネと同じくらい得体の知れない二人だつた。

「大体、得体のしれないってアンタ達が言えること？ アイツ、あんた等の処遇で牧野様や男衆と菖蒲様が揉めた時、啖呵たんか切つたのよ」

初耳だ。

最も、瓜生達はずつと後続車両に押し込められていて、屍カバネとの戦闘以外、外に出る事は無かつたのだが：

『『うるせえだまれ！』よ！ あの老中ろうじゆうの牧野相手に！ 笑つちやつたああのハゲ！』

自分と同じように不審な物を見るような目で奴等を見ていた筈の無名が、そう言いながらきやらきやらと笑う姿に、瓜生は妙に納得した。

無名は力も無い癖に自分の地位にふんぞり返つて偉そうにする奴らが大嫌いだつた。

もしかしたら、仲間だった瓜生達に味方をした事も態度の軟化に関わったのかもしれない。

「誰がハゲだ。サイタマと呼べ、チビツ子」

「チビじやないし！ アンタもいい加減に私の名前覚えなさいよ！」

名前に呼ばれたかの様に、鋼鉄の分厚い扉を開けてのつそりと入り込んできた件のサイタマに、突っ込みをいれる穂積の姿はもうお馴染みの物だ。

自分の意志もお構い無く進んで行く状況に、瓜生は焦りを覚えた。

「ちよつと待て、俺はこんなハゲの許もとに下くだる気は毛頭無いぞ！」

「キサマ、上手いこと言つたつもりか！ 先生の後光が射すほど素晴らしい頭に言い掛けりをつけるとはいい度胸だ！ 燃却してやるそこに直れ!!」

瓜生の言葉に、サイタマに付き従つていた鋼鉄製の木偶人形ことジエノスが怒りも顕あらわ_{カバネ}に右腕を掲げる。その掌の中心からは眩い光が輝き、瓜生は先の戦闘でそこから屍くたんをも一撃で屠る焰ほふ_{ほのお}が出る事を知っていた。

——ヤベエ。ハゲの番犬もいたのか。俺、詰んだかも。

「やめんか」「つつ！」

サイタマの突っ込みチョップに、瓜生の危機は回避される。

瓜生はジエノスをサイタマの番犬と位置付けていたが、サイタマに向けた悪意に対するジエノスの沸点はその実狂犬並みだ。

「しかし先生！ 先生が気になさつて いる頭髪をディスるとは言語道断！ その命を持つて償わせ——」

「なあお前、本当に俺のこと尊敬してる？」

「勿論です!!」

ディスるつてどういう意味だろう？ こいつ等の会話はよくわからない単語が混じることが多い。遠い目をしながらも、瓜生はとつとと要件を片すことに決めた。

「で、こんな押し込み部屋の最後尾車両に何の用だよ？ サイタマ先生」

「いや、サイタマでいいから。もう弟子はいらねーから」

「そうだ！ サイタマ先生の弟子は唯一只一人、この鬼サイボーグジエノスだけで十分だ」

「ジエノス、ストップ。まずは要件話せろ」

「水も食料も燃料も残り少ねえんだってさ。狩方衆の機動部隊束ねてたお前ならなんか案もあんじやねーか？ って言つたら、信用ならねえつて言うからさあ。じごしそうだく 事後承諾で悪いけど、俺達と組んでもらうことになつた」

“組んで”——とサイタマは言つたが、無名の話では“預かり”だ。つまりは、瓜生達が不始末を犯した場合、その責任は自分が取るとサイタマは請け合つたのだ。

このぬぼつとした男が、そこまで自分達に肩入れしてくれる理由が浮かばず、瓜生は口を曲げて言葉を吐き出す。

「お前はそう思わないのか？俺達は幕府転覆を企てた戦犯だ」

「なんで？ 意味ねーだろ疑つたつて」

表情も変えずにサイタマは先を続けた。

「部下の命、救いたかつたから敵だつた奴に頭下げてまでしてここにいるんだろう？ 世界も何もかも滅ぼして終わりにしたかつた奴がすることじやねえ」

「……」

何も考えていないような顔をして、存外この男は状況を判断してくれているのかもしれない。

瓜生は言葉少なに『日ノ本』の地図を部下に持つてくるよう言いつけた。

「顕金駅あらがねに戻るには大雜把おおざっぱに言うと、行きに通つた海沿いの北國街道、山沿いの道・中山道、遠回りの東海道の三行程がある。

本来なら金剛駅こんごうを出た際に湖近くの和田毅大橋補給所わだつおおはしで入れるるべきだつたが、緊

急時だつたからな。

補給所自体はどの路線にも何行程か毎に設けられてはいるが、水はともかく、このご時世だ。燃料については何処も備蓄は切れているだろう。駅以外に入所手段はない。

俺達狩方衆は幕府のお墨付きだつたから優先的に納入できたが、本拠地を失つた四方

川家が手に入れるのは難しいな。相当吹つ掛けられるぞ」

地図を指でなぞり、現状を説明する瓜生の言葉に、サイタマは頭を抱えた。

「うわゝやつぱ金の問題はついて回るのかゝ！こつちにはセールも見切り品もなさそうちもんな」

元の世界でも金には困つていたのに、この世界では必要な金額のケタが違うらしい。

大体、今持つてある蝦蟇口の中身だつて使えないだろう。連れのジエノスに至つては、きつとクレジットカード（黒塗りだが）と、サイタマの為緊急に買うジュース代位しか持つてない筈だ。

千円札とかポイントカードとか、芸術品扱いで高額換金できねえかなゝ　出来ても乗客全員の飯代にはなんねえよな。なんて現実逃避するサイタマだつた。

緊急の問題が戦闘より金とは、ほんとマジで勘弁して欲しい。サイタマの目は遠くを泳いだ。

「…取り敢えず、お前とすればどの路線がマシだと思う？」

「行動を共にしている避難民を何処に預ける気だ？ それ次第だ。八代駅か？ 老中の牧野んとこか？ まさか戦場にする顕金駅まで連れてく気じやないだろうな？」

今、この駿城の乗客は8割方戦力外だ。このまま守り続けて連れまわせば無駄に食費が掛かる。

だが食糧事情もままならぬ中、何処の駅も簡単には難民を受け入れてはくれないだろう。

サイド7を脱出する羽目になつたホワイトベース艦長のブライト・ノアの気持が、今ならわかるサイタマだった。

あゝ頭いてえ。

俺こういうの苦手なんだけどなあヒーロー協会つて大変だつたんだなう。

もう少し物損考慮してヒーロー活動をしてやつてもよかつたかもしけない。サイタマは何かとフォローしてくれた友人のキングに想いを馳せた。

「もつと情報があればなあ」

この世界にはテレビもラジオも携帯電話もない。情報は専らもっぱらこの装甲機関車で手紙の配達というから驚きだ。列車運行管理とかつてどうなつてるんだろう？ やっぱ手旗とかアナログなのか？

「……情報か 得られなくもない」

サイタマの言葉に、つぶやく様に瓜生が答える。敵の多かつた美馬は情報を重んじ、各地に斥候を放っていた。

「……菖蒲殿に狩方衆の記章を揚げる許しを得てもらえないか？ そうすれば駅にいる草と連絡が取れる」

「くさ？」

「各地に情報収集のため、潜伏しているスパイの事です先生！」
へゝお前よく知つてんな。サイタマがつぶやくと、伊達に池波正太郎は読んでいました！ とジエノスは胸を張つた。

「で、どうやんの？」

「伝書鳩を使う。旗を目印に帰つてくるよう仕込んだやつだ」

「おうつすぐえな」

(先生、これからは鳩を捕獲する際、気を付けなければですね)

(だな、気付かねーで喰つちまつたら大変だ)

腹減つても、足に管の付いている鳩は捕まえるのはやめようと密かに確認しあうサイタマとジエノスだった。

結局、記章を掲げる事で狩方衆が仲間を呼び込み、甲鉄城を乗つ取られるのでは？

と懸念した男衆や老中牧野に猛反対されたが、

『これ以上反対するならば狩方衆を連れて甲鉄城を出る』と言うサイタマの脅しに一同は屈した。

自分の身はかわいい。

何度も屍^{カバネ}との攻防により、どう考へても安全な駅に行くまではサイタマ達と行動を共にする方が無難だと悟つたのだ。

ことの成り行きを、甲鉄城の主である菖蒲は微笑んで見守つていた。

「では給水の間、生駒^{いこま}と来栖^{くるす}、穂積さんは警戒を、サイタマさんは狩方衆を何人か連れて探索を、ジエノスさんは吉備土達と川に向かう女衆の護衛を、鈴木は蒸気鍛冶師と鋼鉄城の点検整備をお願いします」

「はい！」「おー」「判つた」「リョウカイシマシタ」

複数の鳩に密書を括り付け、空に放つ。

瓜生の話では、早ければ一両日中にでも結果が返るらしい。

大空に羽ばたく鳥たちに、サイタマはバイオハザードの一場面を思い出した。
「動物はゾンビ^{カバネ}にならねえんだな」

「ああ？」

九
死

「いや、だつて、屍ガバネのもとは死人なんだろ？」
「動物に喰われた屍なんて見た事ないな」

死肉喰われてうつつたりとか――

「姐とか蠅とかは？」

カバト
：瓜生は少し考えた後、仲間を集めた。

「屍が何かに捕食されているのを見た者はいるか？」
「何でもいい。動物でも蟲でもだ」

カバネ 尸は心臓が生きている限り土に帰らない。それはつまりバクテリアさえも**カバネ** 尸を忌避^{きひ}している事になる。

だが、その屍も心臓さえ破壊すればタダの死体と化す。まあそれが普通の人間には難しいのだが――

逆に心臓さえ破壊されなければ、
屍カバネは頭を飛ばしたつて時期に再生する。

甲鉄城の屍戻り、生駒ももげた腕が復帰していた。まあ、彼は脳が人だから、もし頭

がもげたら屍として復活してしまうかもしれないが、カバネーは町のミジ二郎の二郎の事ばかり口にしている。

「屍に詳しいやつと話がしてみたいな」

サイタマ単体においては、あまり屍は脅威ではない。

だが、いかせん敵の量が多過ぎる。半端ない。エゲツない。大事な事だから音速のソ

ニツクの様に、似た言葉を重ねてみた。

元人間であつたモノに対して申し訳ないとは思うが、1匹見つけたら30匹以上はいる。段ボール買いしたミカン箱に、腐ったミカンが紛れ込んだ時よりも簡単に全てが汚染される。

今回の戦い、サイタマとジエノスだけ生き残つても意味がないのだ。

サイタマは日頃ごろ使つてない脳みそを酷使して思考をまとめ始めた。